様　式　C－19、F－19、Z－19　(共通)

科研費
KAKENHI

科学研究費助成事業　研究成果報告書

平成 28 年 11 月 30 日現在

機関番号：72601
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2015
課題番号：24520820

研究課題名（和文）出土資料調査からみたサーサーン式銀貨の流通実態の研究

研究課題名（英文）Circulation of Sasanian and Sasanian-type silver coins: Investigating numismatic information from excavated finds

研究代表者
津村　眞輝子（Tsumura, Makiko）

（財）古代オリエント博物館・その他部局等・研究員

研究者番号：60238128

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　4,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、サーサーン朝ペルシアおよび初期イスラーム政権が発行した「サーサーン式銀貨」が、周辺地域または後の時代にどのように流通、継承されたかを、出土資料から得られる情報をもとに検討することである。具体的には、コインが流通する中で付加される「後刻印」（コインの端に打たれる小さい刻印）に注目した。一括出土コインを精査することで、後刻印がコイン裏面の深い傷「擦痕」と密接な関係にあることを実証し、後刻印は周辺政権が信用度の高い既存銀貨を利用する手段であり、擦痕は銀質検査である可能性を指摘した。その観点から国内外所蔵のサーサーン式銀貨の後刻印データを集め、後刻印の最分類を実施した。

研究成果の概要（英文）：This study elucidates how the powerful Sasanian currency system was accepted or exploited by the surrounding countries or later governments, investigating the excavated hoards and coins. For example, the close relations between some specific countermarks and scrapes on Sasanian coins can be evidenced through my investigation of the hoard from North China. The coins could be scratched by a hard tool before stamping countermarks to test their silver quality.Most of them are thought to have been applied in Central Asia or Northeastern Iran during the late 7th-8th centuries. To solve the enigma of when and where these countermarks were stamped, further research on the historical nature of Sasanian coins in circulation is required by collecting more relevant coins from museums and private collections around the world.

研究分野：西アジア・中央アジア史

キーワード：貨幣　サーサーン朝ペルシア　銀貨　東西交流　初期イスラーム　西アジア　度量衡　境界域

１．研究開始当初の背景
(1) 複数の政権に支配された古代西アジアにおいて、異なる貨幣や度量衡制度がどのように共存したのか。信用度の高い貨幣が周辺地域や後の時代の政権によって、いかに利用、継承されたのか。これが研究代表者の関心事である。

(2) 3 ～7 世紀に西アジア全土にわたる大帝国を築いたサーサーン朝ペルシアは良質の銀貨を大量に発行した。帝国領内だけでなく、ヨーロッパ、中央アジア、中国など広く出土し、東西交流の中で一種の国際貨幣として使用されたと推定されている。７世紀中葉にこの領域を引き継いだ初期イスラーム政権も、独自の貨幣体制を築く迄の数十年間は、サーサーン朝の貨幣制度を踏襲し、サーサーン銀貨様式の銀貨（アラブ・サーサーン銀貨）を大量に発行した。両者をあわせて「サーサーン式銀貨」と呼ぶ。

(3) 現在、膨大な数のサーサーン式銀貨が世界の博物館、美術館、個人に収集されている。19 世紀半ばより主に西欧の古銭学者を中心に研究が進められ、図像や銘文の解析をもとに貨幣が分類された（J.Walker, ***A Catalogue of the Muhammadan Coins in the British Museum***, 1941; R.Göbl, ***Documente zur Geshichte der Iranishen Hunnnen in Bactorien und Indien*** VOL.2, 1967; H.Gaube、***Arabosasanidische Numismatik*** 1973　など)。しかしながら、美術館所蔵コインには出自来歴が不明確なものが多いことから、サーサーン式銀貨が、領域外で実際にどのように流通し、利用されていたのかという研究には直結してこなかった。

(4) コインの流通実態の解明には、文献資料等からのアプローチや考古学的データからのアプローチがある。研究代表者は考古学的アプローチを優先し、中国、中央アジア、西アジア出土のコイン調査を実施してきた。特に、数百枚～数千枚単位で出土する一括出土コイン（Hoard）の精査は、出自不明のコインからは得られない信頼性の高い情報を統計データとして入手することができるため、その調査と公開に努めてきた。

（4）その一つが新疆ウイグル自治区ウチャ出土のサーサーン式銀貨 918 枚の調査である。1959 年発見以来ほぼ未発表であった資料を、所蔵先である新疆ウイグル自治区博物館と共同して全点の撮影、採寸、図柄・銘文分析を実施し、全容を公表する最初の報告書を刊行した（『新疆出土のサーサーン式銀貨』シルクロード学研究９号、2003 年)。

（5）上記調査から、銘文、寸法、重量といったコイン発行時の情報だけでなく、流通する中で付加された要素、すなわち、後刻印、傷、孔、墨書、針書きなどの情報が多く得られた。これらはコインが流通するなかで付加されたものであるため、実際にコインがどのように扱われていたかを示すといえる。

(6) 代表者はそのなかでも、６-７世紀のサーサーン式銀貨に多く認められる「後刻印」に注目した。コインの端に小さな後刻印を押す行為は、この時代に限らず、古代から近現代までみられる。価格変更、他国の貨幣の再利用など、時代や地域の変換期に登場することが多い。
　サーサーン式銀貨の後刻印については、先行研究によって、イラン北東部から中央アジアにおいて刻印されたと推定されている（J.Walker 1941、R.Göbl 1967、H.Gaube 1973)。しかし、具体的な行為者や背景は未解決のままである。

(7) 研究代表者が精査した新疆出土一括コインには、210 枚の後刻印が認められた。さらに興味深いことに、ある特定の種類の後刻印を持つコインの裏面には、幅 3–5㎜、長さ 1–2 ㎝の傷（以後「擦痕」と呼ぶ）がつけられていることが、一括出土資料ならではの統計データを用いて、実証することができた（津村 眞輝子:「サーサーン式銀貨につけられた「擦痕」は何か?」『オリエント』49-2: 40-69。）(図 1)。これによって、擦痕を後刻印と同じ時代の情報として扱ってよい可能性が示された。

(8)サーサーン式銀貨に押された後刻印の刻印者、時代、場所の特定が進めば、サーサーン式銀貨の領域外での活用のされ方を示すより具体的な一例となるはずである。しかしながら、後刻印の研究は上述の 1970 年代以降、代表者を含む部分的な研究があるのみで、殆ど進展していない。その後、新たに発見された後刻印も報告されており、後刻印を総合的に再考する必要性を感じた。

図 1　サーサーン銀貨の表に押された後刻印（上左写真の右下）と裏面の擦痕（上写真の左下）

２．研究の目的
(1) 本研究の最終目的は、サーサーン朝ペルシアおよび初期イスラーム政権が発行した信用度の高い「サーサーン式銀貨」が西アジア～中央アジア～中国西域でどのように流通、利用されたかの実態にせまることにある。

(2)前述したように、従来のサーサーン式銀貨研究は出自不明のコレクションを対象に図像・銘文解析に焦点をあててきた。本研究では出土資料を対象として、出土分布や出土状況等の考古学的検討を行う。

(3)また、一括出土資料調査を丹念に実施することで得られる確実な情報を核として、美術館、博物館等に所蔵されている出自不明の資料をあらためて調査しなおす。具体的には、コインが流通する中で付与される「後刻印」および「擦痕」に注目し、データを収集する。

(4) 以上のように、コイン発行時の情報に偏りがちであった従来の研究から一歩進んで、出土状況や出土資料調査から得た情報、なかでも流通するなかで付加される要素を加えて、現存するサーサーン式銀貨を見直す。それによって、流通当時の実態により近づく事ができるはずである。特に、擦痕による後刻印の再分類は、全く新しい研究・試みであり、サーサーン式銀貨研究が大きく進展することが期待できる。

３．研究の方法
(1) 本研究の核となるのは、国内外に所蔵されているサーサーン式銀貨における後刻印と擦痕の調査、データ化、分類・検討である。

(2)そのために、コインカタログ、所蔵品目録、発掘報告書などから後刻印、擦痕のデータを収集する。各機関で所蔵するコインは全点裏表が公開されているとは限らず、また、細かい傷などの情報は印刷物では把握できないものも多い。したがって、目による観察ができる資料は現地調査をし、より正確な情報の蓄積をめざす。所蔵機関が許す限り採寸、重量測定、撮影を実施する。撮影は許可によってスキャナー、デジタルカメラ、ハンディスコープで対応する。

(3)調査から得られた情報をデータ化し、あらたな視点にたってサーサーン式銀貨を再考する。ウォーカー、ゲーブル、ガウベ(1(2)参照)等、既に発行されているサーサーン式銀貨の集大成をもとに、後刻印、擦痕等の新たな要素を追加しながら、再構築を進める。

(4)上記調査と並行して、サーサーン式銀貨の出土例のデータを集める。また、あらたな未発表の一括出土資料の調査を、イラン国立博物館の研究員とともに進める。

４．研究成果
(1) 後刻印、擦痕のデータ収集
　書籍によるデータ収集とあわせて、博物館、美術館所蔵の資料調査を行った。国内外所蔵品の調査は基本的に研究代表者が単独で行ったが、各博物館美術館の協力が不可欠である。イラン・イスラーム共和国内の調査については、イラン国立博物館元館長のアクバルザーデ氏（Daryoosh Akbarzadeh:イラン文化遺産観光庁イラン学研究所教授)、イギリスの大英博物館はイスラム・イランコイン部門サルコシュ・カーティス女史、アシュモレアン博物館 Luke Treadwell 氏、The Fitzwilliam Museum の Adrian Popescu 氏、オーストリア Center for Ancient World Studies Numismatic Comission マイケル・アルラム氏、ウズベキスタン国立歴史博物館副館長アリプトジャノフ・オタベック氏など、代表者と親好のある研究者の協力を得ることができ、お互いの専門研究についての助言や学問的な情報交換を行う事ができた。

(2) 後刻印と擦痕との関係性の再確認
　本来、出自不明のコインにつけられた傷は後世に付加されたものである可能性があるため、研究対象からはずされる。しかし、博物館、美術館所蔵の後刻印を調査したところ、出土資料と同じように、ある種類の後刻印の裏には、必ず擦痕がつけられていた。従来は出自が不明確であるがゆえに美術館、博物館で眠っていた「傷」が、後刻印とセットになっているものについては、当時の情報として扱ってよい、むしろ扱うべきであることが再確認できたのである。
　ハンディスコープで確認すると、擦痕の長さはほぼ同じでも、使用した道具が完全に同じとはいえない（図 2)。これについては今後の検討事項である。

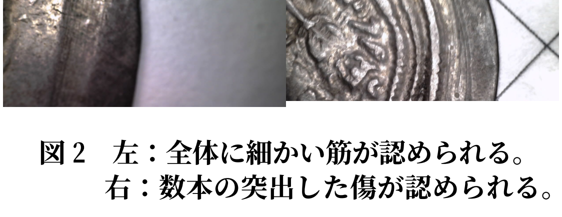

図 2　左：全体に細かい筋が認められる。
　　　右：数本の突出した傷が認められる。

(3)後刻印の再分類

サーサーン式銀貨の後刻印の分類を最初に体系的にしたのはウォーカー J. Walker（1941 年）で、その後ゲーブル R. Göbl（1967 年）、ガウベ H. Gaube（1973 年）が続いた。先行研究では、刻印位置、刻印されているコイン自体の年代、発行地なども考慮しながら、基本は図柄によって分類している。

今回収集した後刻印の種類は当時の種類より増加し 60 種以上になる。図柄から分類すると、先行研究と同じく①動物、空想動物、②人間の顔、③文字（バクトリア文字、パフラヴィー文字、ソグド文字、アラビア文字）、④シンボル／タムガの 4 種類に分けられる。

ここに「擦痕」の有無を新たな分類基準に加えた。例えば、「シムルグ」という空想動物（有翼ラクダ）は後刻印のなかでも最も数量の多い図柄であるが、同じシムルグでも、裏面に擦痕があるタイプと、擦痕が無いタイプに分類できた。

また、エフタルの紋章を示す後刻印には擦痕があり、7 世紀末にアフガニスタン北部で刻印されたバクトリア語銘の後刻印に擦痕は無いなど、発行者をある程度特定できる後刻印において、擦痕の有無が分かれた。従来の図柄とは異なる角度からの分類であり、後刻印の行為者、時代、場所等を絞っていく際の大きな鍵となった。

(4) 出土地からみた後刻印

出土地がわかるサーサーン式銀貨の一括出土資料の内訳を調べた結果、サーサーン朝ペルシアの東領域である中央アジア、アフガニスタン、西域出土の資料において、後刻印が含まれる率が高いことが判明した。例えば、新疆出土一括コインでは 22%、アフガニスタン出土とされる一括コインでは 57%のコインに後刻印が押されている。逆に、イラン本土や、シリアなどの帝国西領域から出土する一括出土コインには、後刻印はあまり含まれていない。例えば、シリア・ダマスカス出土一括コインでは、1400 枚を越えるサーサーン式銀貨のうち、後刻印は 9 枚のみである。

また、大英博物館における調査では 191 枚ものサーサーン式銀貨に後刻印を確認できた。出自を調べると、カニンガム（A. Cunningham）、チャールズ・マッソンらのインドコインコレクションである。

以上のように、出土地からみても、後刻印はサーサーン朝ペルシアの東側における習慣であることが確認できた。

(5) 後刻印が押される意味

一括出土コインに含まれるコインの年代幅をみると、サーサーン式銀貨が発行後 1 世紀間以上流通していたと考えられる例があり、信用度の高いサーサーン式銀貨が、そのまま長く使われていた可能性を示す。

後刻印も同じく、信用度の高いサーサーン式銀貨を「活用」する手段であったと考えている。7～8 世紀の後刻印は、それ以前のものに比べて圧倒的に種類が増え、銘の言語も多様化する。この時代はイラン北東部から中央アジアにおいて弱体の政治的権力が乱立しており、そのなかに貨幣発行の余力はなくとも、既存の銀貨に後刻印を押す事で代用した者がいた可能性がある。擦痕を観察した結果、かなり硬いもので擦っていることもわかった（図 2）。この行為で考えられるのは、表面を削ることで確かめる銀質の検査であり、そうであれば、擦痕をつける習慣は、銀質を問う時代、民族に属するといえる。

以上のように、後刻印と擦痕のデータを収集し、後刻印の刻印者、地域、時代を解明していくことは、サーサーン式銀貨の周辺諸国での利用のされ方の実態に迫ることになる。さらに、後刻印を押す側の政治背景や勢力範囲をも知る手がかりになるはずである。

(6)サーサーン朝ペルシアの西側領域

サーサーン朝の東側においては、後刻印を用いてサーサーン式銀貨を受容していた様子がみえてきた。対比として、西側境界域をあらためて調査対象に加えた。

サーサーン朝ペルシアとローマなどの西側政権との境界域にシリアのユーフラテス川流域がある。残念ながら、シリア内戦により現地調査はできず、報告書等による調査に限定される。一方、代表者が所属する古代オリエント博物館は 1970 年代にユーフラテス川中流域の要塞（テル・ミショルフェ）を発掘調査しており、出土資料の一部が当館に保管されている。出土状況から、この砦はサーサーン朝ペルシアの攻撃をうけた砦であると推定しており、出土資料の再検討を行った。貨幣、度量衡関連資料としては、ローマ属州シリア発行の一括出土コインは調査済みであったが、今回あらたにローマ帝国公式の分銅（カップウェイト）が含まれていたことがわかった。現在のところサーサーン朝ペルシアが地元に残した明らかな痕跡はないが、東側との好対照をみせており、今後も周辺遺跡も含めて出土資料の再検討を続ける。

（6）一般公開

本研究で得られた新知見は学会等で発表した。諸事情により研究期間内での発刊が間に合わなかった論考もあるが、今後出版される運びで進んでいる。最終年には、イラン国内のサーサーン式銀貨調査を共同で進めている元イラン国立博物館元館長のダリユーシュ・アクバルザーデ氏（Daryoosh

Akbarzadeh:イラン文化遺産観光庁イラン学研究所教授）を日本に招聘し、研究者間の話し合いをもつ一方で、ペルシアの銘文についての一般人向けの講演会を実施した。同時にペルシアの文字に関する小さな展示や、文字に関する特別展を開催し、サーサーン朝ペルシア銀貨を紹介した。

また、研究代表者が「サーサーン朝ペルシアとその境界域のコイン」（古代オリエント博物館講演会）、「シルクロードを渡るコイン」（シルクロードの会講演会）などの公開講演をおこない、学会等で発表した研究成果を、一般の方向けに解説した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計５件）

① 津村 眞輝子「北シリア出土のローマのカップウェイトーテル・ミショルフェ出土の青銅製碗－」『第 21 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』査読無、2014 年、96-107 頁。

② Hiroyuki Kawanishi and Makiko Tsumura, Archaeological Investigations in The Rumeirah and Mishrifeh Areas. In Keiko Ishida, Makiko Tsumura, Hidetoshi Tsumoto (eds.) ***Excavations at Tell Ali al-Hajj, Rumeilah. Memoirs of the Ancient Orient Museum***, 査読無 vol. IV, 2014, pp. 317-323.

③Makiko TSUMURA, Scrapes and Countermarks on Sasanian and Sasanian-type Silver Coins (1), ***Bulletin of Ancient Orient Museum***,査読有, vol.32, 2013, pp. 203-221

④津村 眞輝子「サーサーン式銀貨の後刻印再分類への試み」『第 20 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』査読無、2013 年、92-98 頁。

⑤ Makiko TSUMURA, A Preliminary Report of a Seventh Century Sasanian Silver Drachm Hoard in Ancient Orient Museum, ***Bulletin of Ancient Orient Museum***, 査読有 vol.32, 2012, pp. 175-206.

〔学会発表〕（計７件）

① 津村 眞輝子「サーサーン式銀貨の後刻印にみられるシンボル」日本オリエント学会第 57 回大会、2015 年 10 月 18 日、北海道大学。

② 津村 眞輝子「北シリア、ユーフラテス川中流域のローマの境界域－テル・ミショルフェ・ハッジ・アリ・イッサの資料をもとに－」、2015 年 6 月 14 日、日本西アジア考古学会第 20 回大会、名古屋大学。

③ 津村 眞輝子「北シリア出土のローマのウェイトカップ」第 21 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会、2014 年 7 月 6 日、金沢大学。

④ 津村 眞輝子「西アジアの度量衡制度」早稲田大学社会経済史研究会、2014 年 7 月 26 日、早稲田大学。

⑤ 津村 眞輝子「サーサーン式銀貨における後刻印の再分類」日本オリエント学会第 56 回大会、2014 年 10 月 26 日、上智大学。

⑥ 津村 眞輝子「サーサーン式銀貨の後刻印再分類への試み」第 19 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究会、2013年7月7日、奈良県立橿原考古学研究所

⑦ Makiko TSUMURA, “ Sasanian Silver Coinage in Central Asia and India ”, International Conference on Iran-India: Sasanian and Post-Sasanian Periods、2013 年 3 月 21 日、インド国際センター（ニューデリー）

６．研究組織

(1)研究代表者

津村　眞輝子（TSUMURA, Makiko）

古代オリエント博物館　研究員

研究者番号：60238128